

渦外の人

杉本利男

渦外の人

杉本利男

著者略歴

杉本 利男

昭和13年 福井県生まれ 武生高校卒

中央大学大学院文学研究科修了

駿台学園勤務

著書「錆びた十字架」,「うぶげの小鳥」(永田書房)

〒183 東京都府中市住吉町2-30-31

住吉住宅4-806

渦 外 の 人 定価 1,600 円 (本体価格 1,553 円)

平成2年8月10日印刷

平成2年8月15日発行

著 者 杉 本 利 男

発行者 清 水 英 雄

発行所 揺 籃 社

〒193 東京都八王子市散田町4-4-9

振替 東京 7-153487 TEL 0426-61-3897

印刷/(株)清水工房 製本/(有)宮沢製本

© 1990 Toshio Sugimoto Printed in Japan

ISBN 4-946430-59-8 C0093 P1600E

目次

うすばかげろう 3

グリーン先生とワタシ 57

夜半の嵐 119

うしろの正面だあれ 188

渦外の人

うすばかげろう

私は今こんな不思議な経験をし、過去の自分を深く反省しています。背筋の寒い思いもしています。この悪寒は重態のせいではないような気がします。この不思議な経験……、これはこれまで私がそう思い込んでいただけの常識かもしれません。私だけでなく健康な人はみな、そう信じているのです。だから人はみなこの時ばかりはと、心を許してありていに思ってたままに語るのです。何十年も隠し続け、偽り続けてきたものを、この最後と信じる瞬間に開放し、言葉に翼をつけ、行動にはずみ車をつけるのです。

実はみんな聞えていたのです。何もかも見えていたのです。こうして固い畳の上に横になり、私を取巻くすべての人が私の明日の死を予測している今、私には事の真相の一部が了解出来たのです。千人なら千人、万人が万人この事を知って、次の世界に旅立ったのです。今になって思えば滑稽な、この世の中です。

嘆き悲しんでいる姿も、今にして思えば茶番です。喜び勇んでいる事柄も、悲劇への通路

だったのです。でもそんなことよりも何よりも傑作なのは、もうこの人は死ぬんだ、言っても聞えない状態だと確信した時の、人間の変わりようです。人はここで脱皮するのです。成り出でない人間は幼虫のまま死んで行く蟻地獄みたいなものです。そんなことをぼんやり考えてみたら、日常人間のとる振舞いが何と曖昧で、上っつらなことでしょうか。でもこれは私も犯してしまった罪深いことだと思いますが、今からでも許していただけるでしょうか。

私の甥が單車事故で顔も足も台無しにした時のことです。洋という名でしたが、彼は勉強をするからという理由で、親に中型の單車を買って貰いました。洋君は取りたての免許証を皮ジャンパーの内ポケットにしっかり押し込んでから、誇らしくアクセルを踏んだそうです。すがすがしい気分だったに違いありません。大学のことはばかり気にしている担任のこと、浪人したらと世間体ばかりにおずおずしている姉や、男の子にはお金さえ与えておけば何もかもうまくいくと信じている道理の知らない父親のことなど、何もかも一切合切忘れて……、快適だったに相違ありません。

黄信号が光っていて、まだ大丈夫と思い、甥はアクセルをふかして右折したそうです。事情はよく分りませんが、顔中擦り傷だらけになり、頬に無くしかけたものの肉を移植する手術が必要とされました。その上右足首を失い、歩行も不自由になったのです。

私たちが見舞った時には、彼は顔中を包帯でぐるぐる巻きにし、目と鼻と口だけ辛うじて穴を残していました。そんな甥を見て、

「あんな醜い身障者になって生きていくくらいなら、いっそのこと死んじゃった方がいいのにね。本人にも、残された人たちにも……」と私の母が呟きました。

「そうだね」

私は曖昧ながらも母に同意しました。不自由な体で生き長らえる洋君の哀れな姿が、まず心に浮んだのです。

「あんなぶざまな格好でいられたら、明美ちゃんの縁談にも差しつかえが出るし……」

母の口ごもるような声が病室に広がりました。苦しみ喘いでいる洋君を見下ろしながら、あの時私は母の言う通りだと思いました。聞えないからいいようなものの、どきりとする瞬間でした。いつもは心優しい母が、こんなにもはつきりと意見を述べるのを、感心して聞いたほどでした。毅然とした言い方に、いつにない恐れを母に感じてしまいました。私の母はそう言うってから、整理箱の上に置かれた花を、花瓶ごと抱えて部屋を出て行きました。私は口を開け、壊れたポンプのように、スウスウ音をたてて胸で息をしている洋君を覗き込みました。気持ばかり目に涙を浮べて苦しんでいるみたいでした。

生きのよい花だけを花瓶に残し、他の花は屑箱に捨てて、すっきりした花束を持って母が

戻って来ました。洋君に悪いような気がして、それを見ていなければいいのと心の中で祈っていました。花数も少なくなつて、確かあの時淋しい思いをしたのを覚えています。私も今は花を下から見上げています。花の裏はきれいなところか、無気味なものです。

洋君の姉は町の証券会社に勤め、給料は大卒の男性ほど取っていましたが、なかなか縁づきませんでした。かつて母代りをしていたたたかさが、男性を寄せつけない強さとなつていたのかも知れません。当時大学を出てぶらぶらしていた私は、彼女が姪でなかったら一緒になつてもいいのになどと、ぼんやり考えていました。明美さんは弟の洋君をあまり見舞わなかつたようです。見るに堪えなかつたのかもしれない。そばにいたところで、何一つ洋君の痛みを和らげることは出来ないと言つたのを思い出します。肉体的にはそうであつても、心の痛みをほぐすことが出来ないだろうかと疑つたのも、あの頃だつたと思います。

洋君はさらに尻の肉を頬に移植し、手にも足にもひきつりを残して退院しました。身内の私でさえ、じつと見詰めたことはなかつたのです。洋君の心の痛みをえぐり出すように思えたからでしょう。洋君もきつとその方を好んでいたと思います。洋君は毎日洗面時に自分の顔を眺め、その都度どんな思いだつたでしょう。小さな四角い鏡を身につけていて、しゅっちゅう眺め、髪をとかしていたということですから、安心してよいのでしょうか。

洋君は結局高校を卒業しませんでした。欠席日数が超過してしまつたのです。どうしても

改めてさらに一年通学する気にはなれなかったようです。その時の洋君のじかの言葉は何も聞いていません。周囲の人たちの意見や言葉から、洋君がじわじわとある方向に押しやられて行ったような気がしてなりません。今にして思えば納得して静かに歩んで行ったように思えてくるのです。どんな思いで暗い谷間へ入り込んで行ったのでしょうか。洋君は半年ばかり父も姉も誰もいない明るい昼を、静かな家でだらだら過ごしていたようです。足の不自由な洋君が私の母を訪ねて来たのは、春の兆しが見え始めた頃だったそうです。

「おばあちゃん、山奥のダム工事現場へ仕事に行こうと思うのだけれど、どうかね」

自分では行くことに決めてしまっている言い方だったと母が言っていました。

「どうかねって……、洋君のその不自由な手足で仕事口があるのかい」

「お金は沢山出せないけれど、食べるくらいは何とかなるって……。飯場なら一人や二人はどうにでもなると言ってくれたんだ」

うつむいている洋君の鼻の頭からたまっていた涙がぽとぽと落ちました。私の母はそんな思い詰めている洋君を、可哀相だと思ったと言っていました。

「洋君の思う存分にすることがいいよ。おばあちゃんが、洋君に行きなさいとも、よしなさいとも指図は出来ないもの。お父さんは何と言っているのかい」

「父ちゃんにはまだ相談していかない」

洋君は手の甲で涙を拭った。「行ってみるよ」ぽつりと付け加えて帰って行ったそうです。母はその時ほっとしたそうです。姪に縁談を持って来た人が、実際に洋君を目の当りに見れば、気持のよいものではないのです。洋君という障害者がいるとしても、身近にいなければ、その方が……母は呟くように言いました。物分りがよいと思っていた母が、洋君の時、間違ひなくそう言ったのです。

「そりゃ、そうだね」

私もそう言ってしまったのです。今思っているような、そんなに意味深く言ったつもりはありません。でも今は受け止め方が違います。

洋君は残雪が斑に広がっている神通川上流のダム工事現場へ出掛けて行きました。生家を逃げるように静かに出て行ったのだと思います。かなりたつて奥山深く入り込んだのを、私の姉つまり洋君の母の法事か、何かの折に聞き及びました。その時は誰も驚いた者はいませんでした。ほっとした者ばかりだったように思います。その時初めて洋君のことを客観的に冷めた心で話し合えたように思いました。今までは皆がそれぞれの立場で周囲を気にしていたのです。

洋君が不在のまま、洋君の姉の明美さんが嫁いで行きました。連絡を取ったが返事が来なかったと花嫁の父が言い、婿方の家族もみな、電源開発でお国のためになっているのだから

ら、仕方のないこと、むしろ結構なことと洋君を褒めたたえていました。あの時の明美さんの朗らかな顔が、今でもはっきり思い出せます。私も内心ほっと安心していた一人だったのです。あの時はまだ、この当り前の不思議な経験がありませんでしたから、出席しないでいる洋君のことを、洋君の側から心底考えてみることなど、思いもつかないことでした。穏やかな時が流れ、洋君のことを薄ら忘れかけ始めていた頃、明美さんに長男が生まれました。母にはひ孫でした。明美さんは時々太ったやんちゃな子を連れて来て、慌ただしく帰って行きました。洋君のことはみんなが忘れかけていました。いや忘れようと努めていたのかもしれない。そのことは私の家も含めて、洋君の家も、明美さんの嫁ぎ先も、いつしか触れてはいけないものようになっていました。

「明美ちゃんの赤ちゃん、丸々大きく育っていなさるね。何をご馳走してあげていなさるのかね」

はしゃいで赤子を連れて来た明美と、赤子を抱いて得意がっている母に、隣の婆さんが声を掛けました。「神通川の奥へおいでになった、ほれ、洋君にどことのう似ていなさる」

すっかり落着いた二人は、洋君のことを付け加えられても、その頃には何の動揺もなく、いつまでもだらしなく笑っているばかりでした。洋君は遠い人になっていたのです。それでも二人は隣の老婆を快くは思いませんでした。

そんなある日、洋君の父から洋君がまた大怪我をしたとの連絡がありました。私と私の父はとりあえず富山の病院へ駆けつけました。私がようやく今の印刷会社にか職を得た頃でした。

洋君たちは火薬を仕掛けて、山肌を崩していたそうです。信じられないことですが、岩盤の厚さを読み違え、火薬を多めに入れてしまったとのことでした。そのために土砂崩れが思いのほか激しく、安全なはずの所にまで襲って来たのです。運の悪いことってこの世にはしばしばあるものです。その時の事故で五人が亡くなり、洋君のように、意識不明の重態者が三名いました。この八名のほかは、何百人もの労働者が現場近くにいましたが、怪我人は出ませんでした。あつという間の事故で、爆音とともに五人が亡くなり、三人が土砂や木立と一緒に押し流されたのです。

「洋君は被害に遭うような場所には、本来いるはずがないのに……と現場監督が言っていました。うちの者はあの範囲じゃ、危険な円内だったとね」

隣のベッドの重態者に付き添っていた、身内らしい男が説明してくれました。

父と私がほとんど同時に声を出していました。後の方は父にまかせて、私は父に合せて頭を振っていました。

「洋君はいつも厄介な、危ないことがある場所へ、嗅ぎつけるようにして現われていたって

いう話でした。わしらにもどういふことかよく分らないけれど……」

その男は言わなくてもいいことを、口にして自分で苦しんでいる風でした。

私は直観的に、体の不自由な洋君が自由を求めて右往左往していたのだと思いました。それは少しでも一人前に近づいたための、けなげなものがきだったのです。私は少しばかり哀れに思い、布地に包まれた豚肉の塊のような洋君を、同情して見下ろしていました。しかし今になって思うと、いかに私たちの方が憐れみに満ちた情けない人間だったかと、心から恥ずかしく思っています。結局洋君は、私たちが自分たちの仕事に戻り、洋君のことを気にしなくなった頃、富山のあの薄汚れた病院で、ひっそりと息を引き取ったのです。どんなに淋しい思いをしたことかと、私は今自分の置かれた立場から類推しています。あの後一度でもよいから、一時間でも洋君を訪ねておくべきだったと後悔しています。

洋君たち七人の慰霊碑が、ダムサイドで除幕されたのは、やがて深い雪に山全体が覆われる前の、束の間の晩秋の一日でした。この日は明美さんと二人の赤ちゃん、洋君の父と義母、それに父と私が参列しました。秋も冬に移る頃で紅葉の季節はすでに去っていました。木末に冷たい風が吹き抜ける工事用の険しい山道を、幾台かの自家用車と共に上って行きました。洋君の慰霊と供養というよりは、何となく時季外れの行楽といった雰囲気でした。車を出てダムサイドに立つと、一方は目も眩むばかりの急直下のコンクリートの壁がどこまで

も下にのびていました。足のすくむ思いでした。はるか下の方に緑濃い水の広がり、絵の具をしぼり出したように張りついていました。水の色とはとても信じられませんでした。ダムにせき止められた水は、空の色を映して静かな青黒い色でした。発破を掛けてえぐり出した土の中から出て来た、五平餅のような形をした自然石が、白い布の下から現われました。裏側には七名の殉職者の名前が出ていました。洋君の名前も立派に刻まれています。洋君の父が、息子の名の上を右手で幾度もなぞっていました。凶報が届いてからかなり時間が経っていたからでしょうか、洋君の父は少しも悲しい風には見えませんでした。義母も同様でした。私も曇ってはいませんでした。黒い雨雲が手の届きそうな峰を覆い、冷たい風が私たちを吹き抜ける時、私たちは顔を歪めました。

「立派に面倒を見ていただいて、ありがたいくらいだね」

私の父が洋君の名前を見ながら、洋君の父に言いました。

「大きな会社に入っていたお蔭です。それに七人も一緒だったから……」

「小さい時からずっと何か余計なことばかりして、皆を困らせてきたけれど、今度だけはちよっぴり気の利いたことをしたわね」

明美さんがむずがる上の子をなだめながら、澄んだ声で言いました。

洋君のことで、こんなにしてみんなが喜び合ったのは初めてのことだと思いました。それ

までは洋君も洋君でしたが、洋君の父も姉も、そして私たちまでがいつも渋い顔で対し、事あるごとに小言を言って非難し続けたように思います。生れた時からではありません。単車事故で障害者になってからは、洋君に対するみんなの態度は、相談をしたように決っていました。この土地柄上そうなるのです。それ以前にはどうだったかは、私にははっきりした記憶がないのです。不運にも洋君が生れながらの障害者だったら、あんなではなかったと思います。自分で原因を作ったのではないのですから、親も周囲の人も嫌って避けはしても、個人を責めたりはしなかったと思います。

期待していた洋君があんなになったから、みんなでいじめたのでしょう。あの時あんな大怪我をした洋君を見て、原因を作ったのは洋君だとみんなが思っていました。洋君の担任の先生は、受験勉強や学歴社会に反抗する苛立った気持が、洋君を暴走の道に追いやったのだろうと言いました。負けたのは洋君だけだと先生は怒った声で言ったそうです。何十万という受験生がいるのに、自ら道を塞ぐ生徒は数少ないと……。

どうしてあの頃私も、他の人もそのことに気付かなかったのでしょうか。強情で、突っ走っている洋君が、実は気持の優しい、気の弱い子だってことを……。洋君は荒々しくて、頑丈なほど強いとみなが信じて疑わなかったのです。担任の先生が、洋君は弱いから負けたのだと説明してくれても、誰もそのようには聞き取りませんでした。強いから行動に出られるの